



淳之介 エアポケット わが文学生活 1977 - 1979

潮出版社

エアポケット

定価 九八〇円

昭和五十七年三月 十日 発行

昭和五十七年四月 十日 二刷

著 者 吉 行 淳 之 介

発行者 富 岡 勇 吉

発行所 株式潮出版 社

〒102 東京都千代田区飯田橋三一一三

電話 東京(03) 230230 〇〇七四一 (販売部)

振替 東京 五一六一〇九〇

本文印刷 大日本印刷株式会社

付物印刷 栗田印刷株式会社

製 本 東京美術紙工

乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えいたします。

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めて下さい。

© J. Yoshiyuki 1982 Printed in Japan

目次

一九七七年

好きな詩

『怪しい来客簿』推薦

奥野健男の頑固な部分

川端賞選評

紳士トリストラム・シャンデイの生涯と意見

太宰賞選評

権威

「虚構の春」について

木の洞穴

ボルドーの南

44 40 36 23 22 20 19 15 15 11

難航また難航

睡眠薬と高見順

「死の棘」を読む

『ブレイボーイ傑作短篇集』編者あとがき

葱とタマネギ

ひとりの時間

『日本近代文学大事典』を推す

可能性に賭ける

『世界ドジドジくらべ』まえがき

父エイスケについて

『佐多稲子全集』を推す

谷崎賞選評

深夜の妄想

和田さんの塩煎餅

48 50 53 57 58 62 63 64 66 68 84 85 86 91

カレンダーの謎

斉加年絵草紙讃

『恐怖対談』あとがき

一九七八年

慶祝慶賀大飯店

千の眼

文壇「酒」交遊録

恐怖について

感想

鞆

排便についての賭

芥川賞選評

埴谷さん

オペラ「娼婦の部屋」

「贅沢貧乏」を読む

『拒絶反応について』あとがき

むかし恋しい銀座の柳

怪しい笑い

感想

川端賞選評

後日談ひとつ

追悼・柴田錬三郎

私の文章修業

太宰賞選評

「花影」を読む

軀

パチンコ必勝法

芥川賞選評

『和田芳恵全集』を推す

『酔っぱらい読本 壱』編者あとがき

「夜の残り」を読む

判定に自信なし

谷崎賞選評

『酔っぱらい読本 弐』編者あとがき

私の一九七八年

赤線地帯の島尾

ワンハンドレッドアンドワン

一九七九年

野間賞受賞の言葉

エアポケット

初出一覧

装丁

前川
直

エアポケット

わが文学生活一九七七―一九七九年

一九七七年

好きな詩

この三十年ほど、ほとんど詩を読んだことがない。しかし、戦争中にはたくさん読んで、何人かの好きな詩人ができた。とくに、中原中也と田中冬二が好きになったが、中也についてはすでに多くのことが言われているので、なかでも好きな詩の一つを紹介するだけにしておく。

帰郷

中原中也

柱も庭も乾いてゐる

今日は好い天気だ

椽きの下では蜘蛛の巣が

心細さうに揺れてゐる

山では枯木も息を吐く

あゝ今日は好い天気だ

路傍みちべたの草影が

あどけない愁みをする

これが私の故里ふるさとだ

さやかに風も吹いてゐる

心置なく泣かれよと

年増婦としまの低い声もする

あゝおまへはなにをして来たのだと……

吹き来る風が私に云ふ

糸魚川街道

田中冬二

白馬凍豆腐

立札のたつてゐる桑の畑

しろい蝶が力なくとんでゐる

頬被りの雪袴の百姓

——盆前に稻穂がでねえなんて……

朝晩慙うも寒むくちやなあ……

白馬は雨雲がして裾の方だけみえる

糸魚川へ

田中冬二

越後はあかるかつた

姫川の白い礫に越後はあかるかつた

僕は糸魚川街道を 村の駄菓子屋で買った黄色い風車をまはして歩いた

山の村で蜂に刺されて泣いた人よ

海が見える

海が見える

ああ もう青い青い海が見える

糸魚川の町へはひつたら 僕は何により床屋へとびこまう

思いもかけぬことに、この詩人田中冬二と昭和二十三年に一年ほど私は職場をともにした。

大学を中退して私の入社した出版社が倒産しかかっていたとき、銀行を定年退職となった田中冬二氏が、経理面の重役として入社されてきたのだ。

氏は、長身瘦軀、黒縁の眼鏡をかけ鼻下にひげを蓄え、一見銀行マン風であったが、じつに若々しい情熱の持主で、ややせつかな話し方をされた。内心にあるものを吐き出すのがもどかしい、という感じであった。

この会社は、下降線をたどりつづけ、一年足らずで倒産したので、氏はいろいろ苦勞されたとおもう。

数年前にお会いしたときにも、^{かくしやく}豊饒としておられて、

「いやあ、あのときには、ひどい目にあった。しかし、あの時期は、いま思い出すと懐しいなあ」

と、当時と同じように、青年のような情熱のこもったややせつかな口調で話されるのであった。

(四月)